

韻律は個人のものか

- 作者不詳のインド古典文献の同定と層分けのために -

中谷 英明

神戸学院大学

歴史意識の欠如はインド文化の大きな特徴をなしており、紀元前15世紀頃から集積されてきた膨大なインド古典の作品は、成立の年代不明のものが多く、ここでは、韻律を手がかりとして諸作品の関係や、あるいは一作品中の異なる層を解明する試みについて述べる。従来の研究は、個々の作品について使用されている韻律の種類と比率を示すに留まっていたが、コンピュータによって綿密な分析が可能となり、これまで全く知られなかった事実が明らかになりつつある。ことに韻律書に規定のない自由律部分が奇妙なパターンに従っており、この部分こそ、時代、場所、宗教学派、あるいは作者の標識となるのではないかと期待される。

IS THE METRE PERSONAL?

- A search of metrical factors helping to recognize the redactors of Indian classical literature or to distinguish layers in one literary work.

Hideaki NAKATANI

Kobegakuin University (Kobe, Japan)

The authors or redactors or even the approximative date of redaction of Indian classical literature often remain unknown to us, as a result of the almost entire lack of historical notion on the part of Indians. The present investigation aims at elucidating the relationship of these works, or distinguishing layers in one work, by analysing their metrical peculiarities. The use of computer for this purpose, which has not been tried before, enables us to discover interesting facts. Here we present one of them, a fact recognized in the use of the most popular metre called Sloka, and particularly useful for our aim.

古代インドの各種の文献は、インドのあらゆる歴史事象と同様、おしなべて多少とも年代が不確定である。『リグ・ヴェーダ』以来の宗教文献や、『マハーバーラタ』、『ラーマヤナ』などの人口に膾炙した大叙事詩は言うに及ばず、仏教やジャイナ教など非正統派宗教文献、戯曲、詩、物語などの文学作品から、『マヌ法典』、『実利論』などの法律・政治書をはじめとする学問の各分野の専門書に至るまで、正確な成立年代が知られるものは極めて少ない。

近代インド学は、およそ2世紀前に創始されて以来、種々の視点からこれら諸文献の絶対年代、相対年代の分析を行ってきたが、今もって5世紀もある推定年代幅を縮小し得ないものもある。しかしこの状況は、最近10年間のコンピュータ利用の普及によって打ち破られつつある。それは幾つかの面で起こっているのであるが、ここでは韻律分析からごく最近明かとなった興味深い事実の一つを報告する。

インド古典の特徴の一つは、文学作品、宗教文献のみならず、学術書までもが多くの場合、韻文で綴られている点である。その韻律法は、紀元前2千年期の半ばにアリア人がインドに移住する以前に遡るもので、古代イラン語文献はもとより、ギリシャ古典とも源を一にする。その原則は、音節に長、短の2種を区別し、長音節とは、長母音を含む音節と、短母音の後に2個以上の子音を含む音節であり、それ以外の音節、すなわち短母音のみ、または短母音の後に1個の子音を含む音節は短音節とするというものである。

この長短両音節の組み合わせによって、種々の韻律が形成される。なお印欧祖語の韻律形が色濃く残るインド最古の文献『リグ・ヴェーダ』以来、韻律の諸形式は時代と共に変遷して行くのであるが、紀元前5、6世紀に仏教やジャイナ教が現れ、正統派の中でも『ウパニシャッド』が作られる頃になると、シュローカと呼ばれる簡単で柔軟な韻律が最も普及していった。それは8音節の2行が一つの単位を作り、2単位4行（時には3単位6行）からなる。1単位の韻律形には次のヴァリエーションがある。ただし - は長、u は短、u は短長何れも可の音節を示す。また、はポーズ（実際には単語の切れ目）を示す。

	第1行（奇数行）		第2行（偶数行）	
	前半	後半	前半	後半
	1 2 3 4	5 6 7 8	1 2 3 4	5 6 7 8
標準形 (pathyā)	u u u u	u - - u	} u u u u	} u - - u
変形 I (Vipulā I)	u - u -	u u u u		
変形 I' (Vipulā I')	u u - -	u u u u		
変形 II (Vipulā II)	u - u -	- u u u		
変形 III (Vipulā III)	u - u -	- - - u		
変形 IV (Vipulā IV)	u u u -	- u - u		

多くの作品では、標準形が全シュローカ詩節の8～9割を占める。変形の第1行前半部は一見複雑に見えるが、 $\underline{u} - \underline{u} -$ が中心的な形式で、他の形は少ない。標準形第1行ならびにすべての形式の第2行の前半部4音節は、長短何れも許される自由律部分である。ただしこの部分においても、2種の形が禁止される。それは(1)各行の2-3音節は2個の短音節であってはならない、(2)偶数行の2-4音節は長短長であってはならない、というものである。すなわち、(1)すべての行の前半部に $\underline{u} \underline{u} \underline{u} \underline{u}$ 、また(2)偶数行の前半部に $- \underline{u} - \underline{u}$ という形があってはならない。この禁止規定は、紀元前2世紀以前の成立と推測され、ピンガラ作とされる韻律論書に記されるものであるが、第1の禁止は一般によく遵守され、第2の禁止は遵守されない場合がある。

今回韻律分析の対象としたのは、カシュミールの神話的建国とヒンドゥー祭式儀礼の起源を説く宗教書『ニーラ・マタ』である。7～8世紀頃成立したと推定され、約1,400の詩節からなるこの文献に見える韻律は次のようなものである。

表1 『ニーラ・マタ』の詩形

主題名	神話	儀礼	ナーガ名	聖地	要結	計
詩節番号	1-357	358-874	875-953	954-1277	1278-1395	
詩節数	357	517	79	324	118	1395
行数	786	1058	155	649	255	2903
Sloka	654(100)	1058(100)	155(100)	649(100)	223(100)	2739(100)
標準形	560(83)	911(86)	131(85)	588(91)	202(91)	2392(87)
変形	105	146	24	61	21	357
変形 1	35(5.3)	41(3.8)	4(2.6)	10(1.5)	6(2.7)	98(3.5)
変形 2	24(3.6)	24(2.3)	6(3.9)	14(2.2)	3(1.3)	71(2.6)
変形 3	34(5.1)	58(5.5)	3(1.9)	24(3.7)	9(4.0)	128(4.7)
変形 4	12(1.8)	22(2.1)	9(5.8)	12(1.8)	2(0.9)	57(2.1)
Sa-変形		1	1	1	1	4
Ta-変形			1			1
Triṣṭubh	114				32	146
Jagatī	1					1
Aupacchandāsaka	4					4
Vasantatilakā	2					2

『ニーラ・マタ』全詩節の内、94%がシュローカ行であり、そのシュローカ全体の87%が標準形である。シュローカ全体に占める標準形の割合は、時代と共に高くなる。ヴェーダ期には2割に満たなかったものが、紀元前8～10世紀頃には3～4割を占め、さらに紀元前4、5世紀頃には既に6～8割を占めるようになった。

表2 標準形前半部の韻律形

主題名	神話	儀礼	ナーガ名	聖地	要結	計
詩節番号	1-357	358-874	875-953	954-1277	1278-1395	
標準形	560	911	131	588	202	2392
--- U--U	72 ¹¹⁸	188 ²⁷⁰	17 ²⁴	77 ¹²⁴	28 ⁴⁹	382 ⁵⁹⁵
U--	46 ⁽²¹⁾	82 ⁽³⁰⁾	7 ⁽¹⁸⁾	47 ⁽²¹⁾	21 ⁽²⁴⁾	213 ⁽²⁵⁾
U--	79 ¹⁰⁸	167 ²¹⁰	21 ³³	85 ¹¹⁹	32 ⁴⁶	384 ⁵¹⁶
U--	29 ⁽¹⁹⁾	43 ⁽²³⁾	12 ⁽²⁵⁾	34 ⁽²⁰⁾	14 ⁽²³⁾	132 ⁽²²⁾
U-	65 ¹⁰¹	90 ¹⁴⁶	18 ²⁰	76 ¹⁰⁷	15 ²²	264 ³⁹⁶
U-	36 ⁽¹⁸⁾	56 ⁽¹⁶⁾	2 ⁽¹⁵⁾	31 ⁽¹⁸⁾	7 ⁽¹¹⁾	132 ⁽¹⁷⁾
--u	56 ⁹⁴	69 ¹¹³	22 ³¹	61 ⁹⁸	27 ⁴¹	235 ³⁷⁷
U--u	38 ⁽¹⁷⁾	44 ⁽¹²⁾	9 ⁽²⁴⁾	37 ⁽¹⁷⁾	14 ⁽²⁰⁾	142 ⁽¹⁶⁾
U-u	55 ⁷⁶	78 ¹⁰¹	14 ¹⁶	64 ⁸⁵	28 ³³	239 ³¹¹
U-u	21 ⁽¹⁴⁾	23 ⁽¹¹⁾	2 ⁽¹²⁾	21 ⁽¹⁴⁾	5 ⁽¹⁶⁾	72 ⁽¹³⁾
--uu	36 ⁵²	40 ⁶¹	6 ⁷	32 ⁵⁵	5 ¹¹	119 ¹⁸⁶
U--uu	16 ⁽⁹⁾	21 ⁽⁷⁾	1 ⁽⁵⁾	23 ⁽⁹⁾	6 ⁽⁵⁾	67 ⁽⁸⁾

表3 偶数行前半部の韻律形

主題名	神話	儀礼	ナーガ名	聖地	要結	計
詩節番号	1-357	358-874	875-953	954-1277	1278-1395	
行数	650	1061	153	653	225	2742
--- U--U	109 ¹⁸⁹	201 ³²⁸	27 ⁴⁴	94 ¹⁶⁵	24 ⁴⁶	455 ⁷⁷²
U--	80 ⁽²⁹⁾	127 ⁽³¹⁾	17 ⁽²⁹⁾	71 ⁽²⁵⁾	22 ⁽²¹⁾	317 ⁽²⁹⁾
U--	114 ¹⁵⁸	229 ³²⁰	22 ⁴²	105 ¹⁴⁵	55 ⁷¹	525 ⁷³⁷
U--	44 ⁽²⁵⁾	91 ⁽³⁰⁾	20 ⁽²⁷⁾	41 ⁽²²⁾	16 ⁽³¹⁾	212 ⁽²⁷⁾
U-	63 ¹²⁷	131 ²⁰¹	27 ³⁵	74 ¹³⁸	20 ⁴¹	315 ⁵⁴²
U-	64 ⁽²⁰⁾	70 ⁽¹⁹⁾	8 ⁽²³⁾	64 ⁽²¹⁾	21 ⁽¹⁹⁾	227 ⁽¹⁹⁾
U-u	67 ⁹⁴	98 ¹³³	14 ²¹	84 ¹³⁴	35 ⁵¹	298 ⁴³³
U-u	27 ⁽¹⁵⁾	35 ⁽¹²⁾	7 ⁽¹⁴⁾	50 ⁽²¹⁾	16 ⁽²³⁾	135 ⁽¹⁶⁾
--uu	53 ⁸²	43 ⁷⁹	9 ¹¹	40 ⁷⁰	7 ¹⁶	152 ²⁵⁸
U--uu	29 ⁽¹²⁾	36 ⁽⁷⁾	2 ⁽⁷⁾	30 ⁽¹¹⁾	9 ⁽⁷⁾	106 ⁽¹⁰⁾
U-	1		1	1		
U-			1	2		

標準形の奇数行前半部における韻律形の内訳は、表2に示すとおりである。ここで第1～第4音節の形が同じもの、すなわち第1音節の長短のみが異なる2形を一对のものとして扱い、その合計数によって見ると、韻律形とその頻度数の間に、ある種の関係が見いだされる。すなわちそれら6組を頻度順に並べると、第2～第4音節の3音節の形は、---, u--, -u-, --u, u-u, -uuの順に並ぶ。これは短音節0個、1個、2個、の順、そして短音節が同数の場合には左から短音節が現れ、順次右に移行するように並んでいることになる。uu-とuuuが上述の禁止規定によって排除されていることを考慮すれば、全く論理的な順列である。

自由律部分であるだけに、これは予想もされなかった事実である。それはいったい何を意味するのであろうか。先ず推測されることは、韻律書の規定によれば行末の音節の長短がしばしば任意の扱いを受けているから、行頭第1音節もそうではないか、ということである。シュローカについて、しかも自由律部分について、そのような直接規定は勿論、結果としてそれを指示するような規定も全く見当たらない。しかしながら古くヴェーダ期におけるシュローカの先駆形には、行頭音節の任意性が認められるから、ここにみられる事実は、同様の行頭音節の任意性を示していると思われることができる。

では続く3音節の数学的配列は、どうしたことであろうか。2000行以上も標準形シュローカを作り、その頻度をこのように作りなすことは、意図してなし得たこととはどういえない。しかしながらこれが偶然でなかったこともまた、別の自由律部分において同様の事実が看取されることから確認されるのである。表3は、偶数行の前半部分の内訳を示している。偶数行前半は2種の禁止規定が適用されるので、先ほどと同様に第1音節を任意と見なした組を作ると、5組しかできないが、その頻度順は上記の標準形の場合と同じである。このような韻律形の頻度に見られる一定の傾向は、無意識にせよ、この文献の作者(群)の詩作に深く根ざしたものであったらしい。

ここで想起されるのは、韻律書の末尾にしばしば解説される「プラティヤヤ」(確認法)というテクニックである。プラティヤヤは、(1)ある数の音節から、理論的に作られ得る韻律形の全ての種類を知り、(2)それら諸韻律形を配列する論理、(3)韻律形が与えられたとき、その上記配列中の順番を知る方法、を解説している。第1のプラティヤヤは「プラスターラ」(展開法)と言われ、韻律形の配列法を次頁の図のように説明する。そこに説かれる配列は、禁止形を除き、『ニーラ・マタ』に確認される頻度順の配列と一致する。しかしプラスターラを知っていた詩人が意図して詩作時に韻律形の使用頻度を整えたとは考えにくい。偶然の一致であろうか。あるいは詩人の内に無意識に内在する韻律的嗜好によるのであろうか。さらに詳しく検討しよう。

1) 1音節：2種	1. -	4) 4音節：16種	1. - - - -
	2. u		2. u - - -
			3. - u - -
			4. u u - -
2) 2音節：4種	1. - -		5. - - u -
	2. u -		6. u - u -
			(7. - u u -)
	3. - u		(8. u u u -)
	4. u u		9. - - - u
			10. u - - u
3) 3音節：8種	1. - - -		11. - u - u
	2. u - -		12. u u - u
	3. - u -		13. - - u u
	4. u u -		14. u - u u
			(15. - u u u)
	5. - - u		(16. u u u u)
	6. u - u		
	7. - u u		
	8. u u u		

再度、表2を参照願いたい。『ニーラ・マタ』は、内容から神話、儀礼、などの5部分に分かつことができる。各部毎の使用韻律数を見ると、合計に見られた頻度順は各部においてもほぼ同様であることが判る。例外は波線を引いた3カ所のみである。また、第1音節の任意を認めて作った一対を分けて、最初に長があるもののみ、または短があるもののみを比べると、下線（第1音節長）、または点線（同じく短）の箇所において、上記配列原理との矛盾が見える。表3についても同様である。これら表2と表3の原理に違反する部分を抜き出したのが次頁の表4である。

原理に対する違反は、「聖地」と「要結」、「神話」と「儀礼」のパターンはそれぞれかなり類似し、「ナーガ名」は孤立している。『ニーラ・マタ』の内容および音韻、連声、文法などの言語的分析から、これらの5セクションは同一の手になるのではなく、大別すると、(1) 儀礼、(2) 神話、(3) 聖地・要結、に3分することができ、それらは作られた年代、あるいは基とした素材がそれぞれ異なるものと推定されている。（「ナーガ名」部分は短く、しかも名前の列挙に終始しているから韻律形が異なるのは当然である。）従って表4に見られる各セクシ

ンの特徴は、韻律以外の要素の分析から得られた結果とよく一致していると言える。

表4 原理に対する違反

主題名	<表2から>					<表3から>				
	神話	儀礼	ナーガ名	聖地	要結	神話	儀礼	ナーガ名	聖地	要結

U--	-		-	-	-	-	-		-	-
UU--			...	○				...		○
-U-			-							
U-U								
---U			-		-					
U-U	...		○		○
U-U		-		-	-				-	-
U-U										
---UU										
U-UU						

また各韻律形式ごとに、<表2から>と<表3から>とを比較すると、原理違反の起こるセクションが、两部分においてしばしば重なり合っていることも看取される。これもこの自由部分における傾向性が詩人（あるいはそのグループ）ごとによく保持されていることを示しているのではなからうか。このことを別の角度から検討しよう。『ニーラ・マタ』における最長のセクションである「儀礼」部分を前半と後半に2分割して同じ分析を試みたものが次頁の表5である。そこには驚くほどの一致がみられる。900もの詩節を作って、このようにコンスタントな割合を保つということは、よほどの習熟を示唆しているであろう。

この事実を発見してから日が浅く、まだ十分な検討を他の文献について行っていない。『マヌ法典』『ヤージュニャヴァルキヤ法典』、仏典の『ダルマ・サムッチャヤ』について一部を分析した限りでは、上述の自由律部分における韻律の頻度順が数学的配列と一致する現象はやはり確認し得るようである。これらの文献が紀元後の成立と思われるのに対し、より古い『マハーバーラタ』においては頻度順に並べられた韻律諸形式は、別のパターンになるようである。シュローカ自由律部分のこの傾向性が、作者（群）に特徴的である可能性は高く、もしそうだとすれば、作者、年代不詳のサンスクリット韻文文献の分析に有力な手がかりを提供することになるであろう。

表5 儀礼部分の2分割(標準形前半)

	前半	後半	儀礼	全体
詩節番号	358-620	621-874	358-874	1-1396
行数	474	427	911(100)	2392(100)
--- U---	73	63	188	382
U--U	95	93		
	22	30	270(30)	595(25)
--- U---	27	36		
U--U	37	45	82	213
--- U---	10	9		
U--U	55	53	167	384
U--U	87	80		
	32	27	210(23)	516(22)
--- U---	12	15		
U--U	22	21	43	132
U--U	10	6		
--- U---	38	20	90	264
U--U	57	33		
	19	13	146(16)	396(17)
--- U---	24	18		
U--U	36	20	56	132
U--U	12	2		
--- U---	27	23	69	235
U--U	38	31		
	11	8	113(12)	377(16)
--- U---	18	18		
U--U	22	22	44	142
U--U	4	4		
--- U---	27	25	78	239
U--U	38	40		
	11	15	101(11)	311(13)
--- U---	9	7		
U--U	13	10	23	72
U--U	4	3		
--- U---	13	15	40	119
U--U	16	24		
	3	9	61(7)	186(8)
--- U---	10	8		
U--U	13	8	21	67
U--U	3	0		